

△木とは

ホ 8 | 25

△木△の△△△

△△△△△ △△△△△△△△

△△△△△

ホ 8 | 25

△△△△△△△△

△△△△△ △△△△△△△△

△△△△△

この △木 について考えたいと思います。

イソラミチの対処のためにフツヌシが賜ったオコゼとフキ。オコゼは現在でも山の神の供物として捧げられるので、想像出来るのですが、フキ(蔞)は、束にして持って行ったのでしょうか。タキイブスために使うのですから乾燥させたものかとも思います。以前、蔞を乾燥させて燃やしてみました。乾燥した蔞はひよろひよろで小さくなってしまい、燃やしても、これといって変わった煙が出ることもなく、実験は終わりました。単に燃やして煙を出すためならわざわざ持って行かなくても良いと思います。

△木 とは本当に植物の蔞なのでしょうか。

ヲシテ文献での他の用例は ㄩㄩㄩㄩㄩや ㄩㄩㄩㄩㄩ のようにウツホ
が動くイメージだと思われます。

「日本書紀」 に

又 全 剥 眞 名 鹿 之 皮、以 作 天 羽 鞆 とあり、

「あめのはふき」は鹿の皮で作ったフイゴであると思われます。フイゴを
「はふき、又は、ふき」と呼んでいたと考えられます。

「和名類聚抄」では

鞆 を フキカワ 、 踏鞆 を タタラ としています。「フキカワ」
は銅鐸などの鑄造に使う備え付けられたフイゴ、タタラとは区別されてい
ます。持ち運びの出来る送風機といったものようです。

また、炉とフイゴを繋ぐ筒状の焼き物を羽口（ハグチ）と云います。

「この」から ㄩㄩ は 風を送る袋と考えては如何でしょうか。

フツヌシ達は、賜ったフキ（送風機）を使って、タキ（薪※）を燻しまし
た。ハタレ達は、その煙に息が詰まり、咳き込みながら後退していきまし
た。 ※和名抄は薪をタキキとしています。

このように考えるとすつきりします。また、フキとフイゴの関係を考える
と

